

蜘蛛

豊島与志雄

青空文庫

蜘蛛は面白い動物である。近代人的な過敏な神経と、偉人的な野性と、自然的な神秘さとを具えている。

近代人の神経は、何かしら不健康で不気味である。本物の動物的なものから根こぎにされたような趣きがある。運動的知覚がひどく鈍く、感情的知覚がひどく鋭い。この運動の方面の知覚と感情の方面の知覚とが、不均衡になればなるほど、益々病的に不気味になってゆく。——蜘蛛を見てもそういう感じがする。始終巢の真中にじっとして餌物を待ちすましてるところは、苛ら苛らしながら日向ぼっこをしてる近代人の倣がある。そして巢の僅かな微動にも緊張した神経が震えおののく様は、単なる触知でなしに、感情的知覚の域にまでふみこんでる概おもむきがある。あのものぐさと敏感さとは、何かしら病的な不気味なものがある。

偉人は凡て野性を有するというのは、否、野性を有していなければ偉大な仕事は出来ないとするのは、私の持論である。都会人的な巧妙さと精緻さとは、大きな仕事は成されない。野性と云うのに語弊があるならば、大地の中に根を張ってつつ立つてる力とでも云うような、何かしら人為的でない後天的でない本質的な力である。トルストイやバルザッ

クやセークスピアの偉大さは、そういう力に依つてるところが多い。トルストイが如何に無抵抗の宗教を説こうと、彼の力は畢竟肉食的な野蛮な力の上に立っている。——蜘蛛にはそういった野性がある。彼が如何に精巧な巣を張ろうと、如何に過敏な神経を持つていようと、それは到底文明的な所産ではない。文明的な所産となりきれないほど、彼のうちには肉食的な野性がある。細い糸に懸つて空に浮んでいても、地を這う虫けらよりも、遙に大地的であり遙に野性的である。

昔の人は、自然に対して一種の神秘的な恐怖を懷いた。そこから、自然力崇拜の宗教まで生れた。然るに、人間の数が増し文明が進むにつれて、そういう宗教は、そういう神秘的恐怖は、遠く山間僻地へ追いやられて、跡を絶とうとしている。けれども文明のさなかにも、都会の真中にも、ふとその痕跡が見出されることがある。——蜘蛛はその一つである。薄暗い土蔵の二階、物置の片隅、階段の裏などに、大きな蜘蛛の巣が張られていて、その真中にあの不気味な怪物が控えている時、人の心には知らず識らず、一種の神秘的な恐れが湧いてくる。妖怪屋敷や廢墟壞屋に、いつも蜘蛛の巣がつきものとなっているのは、自然そのままの現象ではあるが、また人の心の自らなる連想作用でもある。

蜘蛛のうちでも最も傑出しているのは、女郎蜘蛛である。多くの蜘蛛はどす黒い汚い色

をしているのに、彼だけは、背と腹部とに幾筋もの金線をめぐらして、誇らかに光り輝いている。多くの蜘蛛は昼間隠れて夜分姿を現わすのに、彼だけは、白昼も傲然と巣の真中に逆様に控えている。体躯も比較的大きく、最も精悍である。

その女郎蜘蛛が、東京の市内には見当たらない。私は未だ嘗て市内でその姿を見たことがない。他の蜘蛛は、それぞれの種類を市内で見かけるが、女郎蜘蛛だけはどこにもいない。けれども、東京の周囲、大森、玉川、赤羽、市川などには、女郎蜘蛛が沢山いる。

今年の初秋、私は玉川に行つたついでに、大きな女郎蜘蛛を五六匹捕えてきた。ミルクの空缶に草の葉を軽くつめ、その間々に蜘蛛を入れ、四方に錐で空気ぬきの穴を拵えて、紐で下げて来たのだが、蜘蛛は別に弱つた風も見えなかつた。庭の木に放すと、のそりのそり梢の方へ這い上つていつて、枝葉の茂みに隠れてしまった。

その晩私は楽しく眠れた。「土蜘蛛」や「滝夜叉姫」などの物語を空想することは、吾々の生活を豊かにしてくれる。

そして翌朝、いつもより早く起き上つてみると、何という愉快さだったろう。庭の木々の梢に、あちらこちらに、美事な大きな巣が張られていて、その真中に女郎蜘蛛が一匹ずつ、逆さにじつと構えこんで、背と腹の金筋を朝日に輝かしているのである。私は嬉しさ

の余り、妻や子供達を呼んだ。子供達は初めて見る女郎蜘蛛の不思議さと美しさに眼を見張った。美や神秘に対する子供の敏感さよ。だが、田舎の子供達は、女郎蜘蛛の巣で蟬取りの道具を拵えて遊ぶのである。

それから私は毎日、女郎蜘蛛を眺めて暮した。少しでも変な気配があれば、蜘蛛は巣を揺ぶって警戒する。蠅や蛾が巣にかかれば、一瞬の猶予もなく、飛びついて、くるくると白糸でからめて、巣の中央に持ち返り、暫く様子を窺ってから口をつける。生血を充分に吸う時その腹は大きくなり、食物の不足な時には心持ち小さくしぼんで見える。カステラの屑を放つてやると、白糸でからめておいて食いつきはするが、やがてそのまま下に落ちてしまう。私は幾度も、蛾や甲虫などを生捕って投げてやった。青空の下にすかし見る蜘蛛の姿の、足が長く伸び腹が円くふくれて、背と腹の金筋が美しく輝き出すのが、私の喜びであった。

けれども、蜘蛛は余り幸福でなさそうだった。風のために巣の破れることが多かった。餌も不足がちのように見えた。早朝仄暗い頃、蚊の類の小さな羽虫が沢山引つかかっている破れ巣の横糸を食ってしまい、新しい完全な巣を張ってしまうのを見定めて、私はそれに投げ与えるべき大きな昆虫を、どんなにか探し廻ったことだろう。そのために幾日か、

太陽と共に起き上ったものである。

そして凡そ十日ほど過ぎた或る日の午後、私は一つの蜘蛛の巣に珍らしい光景を見出した。巣の中心から少し下の方に、蜘蛛がじつと動かないでいる。その一本の足に、羽の黒い足の長い赤蜂が、喘ぎながら一生懸命に喰いついている。蜘蛛は後ろ向きになったまま動かない。蜂は全身の力を口に籠めて、足先で蜘蛛の巣を払い落そうとしている。蜘蛛の足が喰い切られるか、蜂の足が巣の糸に絡まってしまいか、恐らく必死の努力であろう。

私は一人気を揉んだ。勿論蜘蛛に味方してである。然し迂濶に手出しは出来ない。やがて、蜂がぱつと飛んで逃げようとした。とたんに、蜘蛛はくるりと向き直るが早いか、くり出す白糸で蜂を絡めた。次にはもう、蜘蛛の足先でくるくる廻転されてる真白なものに過ぎなくなった。凡てが一瞬間のうちの出来事だった。私は蜘蛛の勝利を祝した。

私はそれですっかり安心してしまった。赤蜂は庭にいる虫類のうちの最も獰猛なものである。それに打勝つとすれば、蜘蛛にとつては万々歳である。

ところが、それから二三日後の午頃、一つの巣の蜘蛛が見えない。そして巣の真中から、一筋の糸が長く垂れている。私は驚いて庭へ下りていった。巣から垂れた糸は、低い躑躅の茂みにはいり、更に地面へ達していて、そこに、女郎蜘蛛がぐったり腹這っている。そ

して驚くべきことには、躑躅の茂みの周囲に、一匹の赤蜂が飛び廻っていて、夢中に何かを深し求めてるかのようになり、私が側へ行つても逃げようとしなない。私はかっとなつて、女中を呼んで蠅叩きを取寄せ、蜂を叩き潰してやつた。それから、静に蜘蛛を掌に取上げた。蜘蛛はぐたりとなつたまま、生きてるのか死んでるのか分らなかつた。傷はどこにも見えず、姿勢もくずれてはいないが、動く模様が更がない。私はそれを室の隅に上から箆を被せておいた。そして二三日たつても、蜘蛛はそのまま生き返らなかつた。そのまるで生きた通りの蜘蛛の死体を、私は庭の隅に埋めた。

それから赤蜂の害が屢々起つた。私は赤蜂の姿を見かけると、蠅叩きで叩き潰してやつた。が赤蜂は次から次へとやつて来た。三四匹一緒に飛んでることもあつた。女郎蜘蛛の姿が巢に見えないなと思うと、それは大抵一筋の糸で巢から地面に落ちて、死体となつてしまつていた。背と腹との間のくびれた急所に、蜂から喰いつかれたらしい傷跡が見えるのもあつた。

そして、玉川から来た私の庭の女郎蜘蛛は皆、赤蜂のために害せられてしまつた。残つてるのはただ、昼間隠れていて夕方から巢に出てくる泥坊蜘蛛ばかりである。

女郎蜘蛛のあの美しい色彩は、太陽の光の中で赤蜂の好目標となるのかも知れない。恐

らく赤蜂は背後から狙い寄って、背と腹との間の急所に喰いつくのであろう。然し、その死体を別に食うのでもないらしいところを見ると、何故の襲撃か訳が分らない。それについては、何れ学者の示教を乞いたいと思つている。が兎に角、赤蜂が跋扈して女郎蜘蛛が滅びるということは、淋しいことである。

田舎に旅をして、静寂な自然と素朴な人事とに接する喜びの大半は、都会人としてそれに接するところにあるということが、一面の真理であるとするならば、都会に住んで庭に蜘蛛の巣を張らして楽しむのは、野人としての楽しみであるというのも、一面の真理かも知れない。然しながら、蜘蛛を嫌う者は性格的に弱者であり、蜘蛛を好む者は性格的に強者であると、そういうことが云われないものだろうか。偏奇な趣味の対象としては、蜘蛛は余りに多くのものを持つていると、蜘蛛好きの私は勝手な考え方をしたのである。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第六卷（随筆・評論・他）」未来社

1967（昭和42）年11月10日第1刷発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2006年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蜘蛛

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>